

青春時代のサッカーの思い出

生産機械関東常盤会 杉本 邦昭（生産44年卒）

平成30年6月、2018 FIFAワールドカップロシア大会が開幕、サムライブルーの劇的なベスト16進出に久しぶりにサッカーに対する熱い思いがたぎりました。そこで昭和の時代に関わったサッカーの思い出を気の向くまま綴ってみました。

昭和34年、中高一貫校の修道中学（広島県）に入学しました。当時、修道高校サッカー部は全国高校選手権で1回、国民体育大会で3回優勝しており、全校でサッカーが盛んで自然とサッカーに夢中になっていきました。当時の広島は、浦和（埼玉）と藤枝（静岡）と共に「サッカー御三家」と呼ばれ、日本の中では技術レベルも高かったと自負しています。

広島は、当時からサッカーと野球は人気スポーツでしたが、今でも広島へ帰省した折にはサンフレッチェ広島と赤ヘルファンの熱気に圧倒されています。

1. 昭和30年から40年代の日本

昭和30年代前半の日本のサッカーのレベルは国際的には低かったにもかかわらず、それでも外国人コーチを招聘することは国辱であるとの意見が大勢を占め日本人純血主義を通していました。昭和33年のアジア大会（東京で開催）で、当時最弱とみられていたフィリピンに敗れてしまったことで遂に日本サッカー協会は昭和35年に西ドイツ（当時）からデッドマール・クラマー氏を初の外国人コーチとして招聘することを決断しました。クラマーコーチの指導方法は、「なぜ、そう

するのか」という理論説明と、「正確にその通りやってみせる」という実践で成り立っていましたので、当時の日本代表選手にもキックを基本から教えたそうです。

昭和35年、小生が中学2年の時でしたが、ダイナモ・ロコモティブ・モスクワ（当時のソ連）と全広島の試合が広島市民球場で行われました。当時の広島には芝のサッカー専用競技場がなく、土のグラウンドでの試合をロコモティブが拒否したために、やむなく野球場の外野の芝の部分を活用して試合が行われました。そのため縦・横の長さは通常の試合よりかなり短かったことを覚えています。全広島には日本代表選手も出場していましたが、一般的に親善試合では二桁得点はしないという暗黙のルールがソ連には通用せず、試合は10-0と一方的なものとなりました。日本のサッカーはヨーロッパより30年以上遅れていると言われていましたが、観客席にいて骨身にしみて実感しました。

昭和39年に東京オリンピックが開催されることになり、同年に日本サッカー協会はクラマーコーチのアドバイスに従い、日本代表監督に親分肌の長沼健氏（当時33歳）、コーチに理論家の岡野俊一郎氏（当時32歳）という若いコンビを決めました。クラマー氏自身もアドバイザーとして試合に臨みましたが、このトロイカ体制が日本サッカーを大きく発展させることになりました。その結果、クラマー氏は「日本サッカーの父」と呼ばれています。

東京オリンピックではアルゼンチンに勝つなど8強入りを果たし、昭和43年のメキシコ

オリンピックでは宮本輝紀、釜本邦茂、杉山隆一選手などの活躍で男子オリンピック史上今日に至るまで唯一の銅メダルを獲得しました。メキシコとの3位決定戦終了後にグラウンドに倒れ込み動けなくなったイレブンを見て、クラマー氏は、「初めて大和魂を見た」と感激されたとのことでした。

話は飛びますが、平成6年初頭に勤務していた会社の安全大会での講演を、当時の日本サッカー協会副会長だった長沼健氏に依頼しました。ところが4月のキリンカップで、アルゼンチンのディエゴ・マラドーナの母国での麻薬逮捕を理由に日本が入国拒否したために、招待していたアルゼンチンがスーパースターに対する無礼な扱いだと怒り、出場を辞退するという事態に発展してしまいました。急遽オーストラリアを呼びキリンカップは開催されましたが、平井富三郎会長が混乱の責任をとって辞任され、長沼健氏が5月に会長に就任されました。長沼氏は就任直後で多忙をきわめていたにもかかわらず7月初旬の安全大会には約束どおり講演していただき安心したものです。講演内容は東京・メキシコオリンピックでの選手の奮闘の話が中心でしたが、クラマー氏の「大和魂を見た」との話の段になると、出席者150名の大部分の方がハンカチを手にしていたことが今でも思い出されます。

2. 昭和36年度 修道高校二冠達成

小生が中学3年になった昭和36年度は、3年生先輩たちが国民体育大会と全国高校選手権で優勝し二冠を達成したことが強く印象に残っています。当時は、高校総体にサッカーは採用されておらず、高校三冠の可能性がでてきたのは昭和41年度以降となっています。

優勝メンバーのうち、主将の若山待久氏はクラマーコーチが一目惚れした逸材で、ユース代表でも主将をされていました。広大医学

部に入学後は、たまに西日本大会や五大学に出場されていましたが、学業のせいかグラウンドから離れられ寂しく思っていました。ところが平成6年に長沼会長にお会いした時に若山氏の話になり、日本代表チームが海外遠征する時のスポーツドクターとして帯同してもらい非常に助かったという話を聞き、サッカー界とは縁があったのだと安心したものです。現在も昔同様の細身の身体を維持されており、千葉県で医療法人を経営されています。

森孝慈氏は早大卒業後は三菱重工業(株)に入社され、東京オリンピックやメキシコオリンピックで代表に選出されました。また、指導者としても全日本監督、浦和レッズ初代監督、福岡アビスパ初代監督と活躍されました。還暦を過ぎても颯爽とした姿を見せておられましたが、残念なことに平成23年7月に腎盂炎で67歳の若さで永眠されました。

3. 昭和40年代 山口大学サッカー部

昭和40年4月に山口大学に入学しました。当時の学生サッカーでは西日本大会と中国五大学の二つが大きな試合で、昭和40年5月下旬に山口で行われた「第11回西日本大学蹴球選手権大会」(西日本大会の正式名称)には中国・四国・九州地区から28チームが参加しました。山大は準決勝で広島商大に敗れ、3位決定戦でも九州産大に敗れ、残念ながら4位となってしまいました。因みに優勝は広大、準優勝は広島商大でした。

当時、夏合宿を行った小野田のサッカー場は、国体があった関係で芝のグラウンドでした。サッカー処の広島にもなかった芝の上でプレイすると技術が向上したような錯覚を覚えたものです。

昭和41年、大学2年になり宇部の工学部専門課程に上がりましたが工学部にはサッカー部がなかったので山口まで練習に通っていました。しかし、宇部線から山口線へと乗り継

いで山口で練習、そして宇部に帰る頃は深夜という生活が続き身体的に無理になってきたので長崎で開催された西日本大会を区切りに本部サッカー部は辞めさせていただきました。その時はシードされていましたが、残念ながら2回戦で福岡大に敗れてしまいました。

昭和41年の秋頃、工学部の狭いグラウンドの更に片隅で、数人の有志を集めてボールを蹴り始めました。グラウンドには野球部、ラグビー部、ハンドボール部がひしめき合っていて、各部の了解を得て境界線付近で細々と練習をしていました。練習前には草抜きと砂利拾いが必須でした。

昭和42年には、そうした努力が認められたのかゴールポストが設置され、やっとサッカーの形が見えてきました。西日本大会には本部とは別に工学部として初めて出場しましたが、1回戦で福岡大と対戦し屈辱の二桁得点の完封負け、ほろ苦い公式戦デビューとなりました。

昭和43年の西日本大会は松山で行われ、準々決勝でまたしても福岡大学との対戦となり0-4で敗れましたが、ベスト8となったのが懐かしい思い出となっています。

4. 現在のイレブン

平成28年11月に昭和40年代当時の本部・工学部のメンバーを中心としたOB会が山口で開催されました。

小生の1年先輩の吉田健二氏(経済学部)は藤和不動産に入社され日本サッカーリーグで“キャノンシュートの吉田”として活躍されました。同期の佐竹博氏(教育学部)は山口県教員団でプレイし、現在はJ2のレノファ山口のアンバサダーとして活躍しています。

還暦をはるかに過ぎたメンバー

ですが、シニアリーグで現役としてプレイしている人、少年チームの指導者をしている人、県のサッカー協会の役員をしている人などがいて、30代半ばでサッカーから足を洗った小生からは皆さんが輝いて見えました。サッカーは年齢に関係なく楽しめるものだと今更ながら感じています。

5. 今後の期待

昭和40年代は本部、工学部とも地域のサッカーをリードしてきたように思いますが、現在は、本部は下位リーグに低迷し、工学部は部そのものが消滅しています。新たな若い力の再結集を期待しています。



前列右端：宮部秀文氏（土木48）、
左端から筆者、佐竹 博氏（教育44）

<山大サッカー OB会（平成28年11月）>



皆川孝志先生とイレブン